

図書紹介

絶滅の人類史

なぜ「私たち」は生き延びたのか

更科 功 著

紹介者：柴 正博

NHK スペシャル人類誕生 (3 回シリーズ) の種本的な本で、人類の進化に関する最新の知見を取り入れ、人類がどのように進化し、私たちホモ・サピエンスが生まれてきたかということが、わかりやすくまとめられている。

人類は、人類とチンパンジー類の共通祖先(大形類人猿)から約 700 万年前に分かれて進化した。これについては、従来、東アフリカ大地溝帯の東側で森林が草原となる時期に、草原で暮らすようになったので二足歩行に進化したという説(イーストサイド・ストーリー)で説明されてきた。しかし、最古の化石人類(約 700 万年前)であるサヘラントロプス・チャデンスがアフリカ中部のチャドで発見されたことにより、それは成り立たなくなった。

直立二足歩行は、短距離が苦手なため、草原では肉食獣に襲われてしまうため、人類以外の他の動物で直立二足歩行が進化しなかった。しかし、なぜ人類だけが直立二足歩行になって生き残ったのであろうか。この本のテーマのひとつは、そのことにある。

樹上生活をしていた大型類人猿のうちで、樹上生活がへたで直立二足歩行を始めるものがいた。その仲間は、森林が疎林に変化する環境にも適応していった。そして、直立二足歩行により、オスが、メスや子のために食物を手で運ぶことができ、集団生活の中でも一夫一婦制のペアを形成するようになった。

420 万～250 万年前に生きたアウストラロピテクス属では、発情期がなくなり、授乳期間も 2～3 年と他の大形類人猿より短くなり、家族や周囲のものたちが共同で子育てをした。そして、授乳している間にも次の子を産むことができ、人類は多くの子供を産むことができるようになり、生き残った。

初期のホモ属であるホモ・ハビルス(約 240 万～130 万年前)は、石器を使い始めていて、



NHK 出版新書 820 円

肉をたくさん食べることで、脳容積が増加した。肉は、高エネルギーであると同時に消化されやすく、腸が短くなり腰まわりが細くなった。そして、食事や消化にかけていた時間とエネルギーを、コミュニケーションの時間に利用できた。

次に出現したホモ・エレクトゥス(約 180 万～10 万年前)は、長距離を走ることができるようになり、手に入る肉の量がさらに増えて、脳がさらに大きくなった。ホモ・エレクトゥスはアフリカを出て、アジアやヨーロッパに分布を広げていった。

ホモ・サピエンスは、30 万年前に誕生した可能性があり、10 万年前以降の寒冷期にアフリカを出て、アジアやヨーロッパに侵出し、約 5 万年前にヨーロッパでネアンデルタール人と遭遇し、しばらく共存していた。

この本の大きなテーマである「生物が生き残るか、絶滅するか」ということは、「優れたものが勝ち残る」のではなく、「子供を多く残した方が生き残る」というものである。そして、700 万年に及ぶ人類史は、ホモ・サピエンス以外のすべての人類にとっての絶滅の歴史にほかならないとして、描いている。